

明石の史跡（４２）足利義昭と明石の浦



天正４年（１５７６）２月の初め、寄寓先の紀州興国寺（和歌山県日高郡由良町）を出発した前將軍足利義昭一行は、８日には備後鞆浦（広島県福山市）に着いている。いったいどのようなルートを使用したのでしょうか。

『安西軍策（あんさいぐんさく）』（毛利家に関する軍記＝国書解題上、５９頁）によれば、「（上略）竊ニ宮崎ヲ惑出明石ノ浦ニ漕寄。宇喜田和泉守ヲ頼マレシカドモ、難ニ面持一ケレバ暫ノ御逗留モナク。其ヨリ備後ノ鞆ニ着」（後鑑４／新訂増補国史大系３７．８８９頁）とあって、興国寺を北上して、１０数キロ先の在田川の河口部の宮崎浦（有田郡）より乗船し、明石浦に漕ぎ寄せたという（途中いずれかの泊に寄港したかは不明）。

一時上陸した義昭は、備前に威を振るう宇喜多直家を頼ったところ、身柄の受け入れには賛同されなかつたため、明石での宿泊もなく、ただちに備後鞆浦にむかった。この記事の問題点は、明石の浦に到着して、さっそくに宇喜多の意向が打診できたことであろう。

明石の浦に、宇喜多の関係者が配置され、諾否の回答をしたとは考えられない。しかしながら港町には、水上交通の関係者が居を構え、彼らを通じて各地の情勢を把握することは可能である。明石川河口部右岸の船上には、当時、国人明石氏の一族で、のちに豊臣水軍の船奉行をつとめる、石井与次兵衛なるものが存在した。彼は翌天正５年（１５７７）３月１３日付で、尾道の浄土寺に一对の大型の絵馬を奉納する。尾道は瀬戸内海航路の要衝にあり、毛利氏の支配下にあった港町である（『明石ゆかりの人びと』７７－８頁）。このような事実から、石井与次兵衛は毛利の領国内との経済交流に従事していたと推測され、備前・備後の状況は、把握していたと思われる。おそらく足利義昭一行に情報を提供できたのは、上述のような人物であったろう。



明石浦